



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3709 号 2017.6.10 発行

伊勢で来年3月に国内初のボッチャ国際大会

産経新聞 2017年6月10日

ポスト伊勢志摩サミットの一環として国際会議や競技の誘致を進めている三重県は9日、障害者らのために考案されたという競技スポーツ「ボッチャ」の国際大会で初の国内開催となるアジア・オセアニア地区オープン大会が来年3月18～22日、伊勢市の県営サンアリーナで開催されると発表した。

県の誘致が実を結んだ。オープン大会では、豪州や中国など約10カ国・地域から約80選手が集まる予定。

この日、日本ボッチャ協会の奥田邦晴代表理事や、日本主将でリオデジャネイロ・パラリンピック銀メダリスト、杉村英孝選手ら3人が津市の県庁を訪ね、鈴木英敬知事に支援を要請。杉村選手は「ボッチャは繊細で醍醐味（だいごみ）のある競技。東京五輪などに向けて競技人口を広げるため、三重での大会を成功させたい」と語った。

ボッチャのファンという鈴木知事は「三重での開催に感謝。ボッチャが平成33年の三重とこわか大会（全国障害者スポーツ大会）から正式種目になることもあり、オープン大会の成功を願う」と話した。

ボッチャは、目標の白のボールに対し赤と青のそれぞれ6個のボールを投げたり、転がしたりして近づける競技。リオ・パラリンピックで日本は銀メダルを獲得、大きな感動を呼んだ。

世界大会「銀」喜び報告 県庁 障害者陸上の川上さん 中日新聞 2017年6月10日

しきりに照れながら祝福の記念品を受け取る川上春菜さん＝県庁で



タイ・バンコクで先月開催された国際知的障害者スポーツ連盟（INAS）陸上競技世界選手権に日本代表として出場し、400メートルリレーで二位に入賞した川上春菜さん（19）＝能登町、七尾特別支援学校珠洲分校卒＝が九日、県庁で県幹部に銀メダルを披露した。

アンカーの重責を果たし、ロシアに次ぐ52秒14の日本新記録でゴールした川上さんだが、普段は極度の照れ屋のため、一言も話せなかった。ただ、同席した日本選手団長の井上明浩金沢星稜大教授によると「初の国際大会にもかかわらずリラックスして調整し、時には冗談も言ったりして、競技面では見事な精神力を見せた」。苦手な野菜をコーチやトレーナーの指示に従ってきちんと食べるなど人間的にも成長し「お父さんに銀メダルを見せる時は誇らしげだった」（支援ス

タッフ）という。

今、最大目標にしているのは二〇二〇年東京五輪・パラリンピック。当面は対象部門で競技種目に設定されている400メートルで大会出場を重ね、出場権獲得を確実にする世

界五位以内の記録樹立を目指す。井上教授によると「国内では既にトップクラスの実力。勝算はある」。一番得意なのは抜群の瞬発力を生かせる100メートルや200メートルのため、東京パラで追加種目となることにも期待を寄せていた。（梅本秀基）

【譲位特例法成立】障害者の社会参加へ扉

産経新聞 2017年6月9日



陛下が使われたラケットを手にする宿野部拓海さん。普段は大切に仏壇に保管しているという＝横浜市の横浜文化体育館（伊藤弘一郎撮影）

「お年を召され、試合会場に来ていただくのは難しいかもしれない。でも、どこかで必ず見てくださるはず。お立場が変わってもお元気で、長生きしていただきたい」

卓球で2020年東京パラリンピックを目指す宿野部（しゅくのべ）拓海さん（25）は、天皇陛下が譲位されても「気持ちは同じ」と話す。

宿野部さんは自宅の仏壇で1つのラケットを大切に保管している。平成27年10月、大分県別府市の社会福祉法人「太陽の家」で陛下とラリーをした際、陛下が使われたものだ。

「ちょっとやりましょうか」。陛下は皇后さまと創立50周年記念式典で同施設を訪れ、選手の練習を見学した際、ラリーをする宿野部さんに声をかけられた。ご参加は“飛び入り”だったが「真剣に向き合っていたいただいた」（宿野部さん）。ラリーの後、陛下は「海外などいろいろな所に行かれるのですね。パラリンピック頑張ってください」と激励された。パラリンピックの舞台を思い描くとき、宿野部さんは陛下のお言葉を思い出すという。

日本障がい者スポーツ協会の井手精一郎元常務理事（92）は「両陛下がいらっしゃらなければ、今の障害者スポーツの発展はなかった」と話す。昭和39年の東京パラリンピック。厚生省（当時）の担当者として運営に関わった井手さんですら「障害者はリハビリで運動する人がいたくらいで、スポーツの大会は想像できなかった」という。

大会では当時、皇太子だった陛下が皇后さまとともに連日、試合会場で選手に拍手を送り続けられた。卓球ダブルス金メダルの渡部藤男さん（77）は皇后さまからトロフィーを受け「緊張でお顔も見ることができなかったが誇らしかった」と振り返る。

「国内でも毎年、続いて行えればいいですね」。大会後、東宮御所に関係者を招いた陛下は、そう述べられた。翌40年に「全国身体障害者スポーツ大会」が始まり、大会は名称を変え、現在も毎年開催される。

「企業だったら引退のご年齢だが、譲位されることはさびしい」。「太陽の家」の吉松時義元常務理事（74）はそう話す一方、「障害者への国民の理解が深まり、今は仕事を持って社会参加するのが当たり前になりつつある。スポーツに限らず、両陛下は障害者の生き方の裾野を広げてくださった」と両陛下への謝意を述べた。

運営スタッフ確保 切実

読売新聞 2017年06月10日

◇障害者フライングディスク協

◇17、18日無料講習会 審判資格取得 参加募る

円盤（ディスク）を投げて正確さや飛距離を競うフライングディスク。10月28～30日に県内で開催される「愛顔つなぐえひめ大会（第17回全国障害者スポーツ大会）」でも実施される競技だが、審判などの運営スタッフが不足し、大会関係者を悩ませている。県障害者フライングディスク協会は、審判資格保有者を増やそうと、一般向けの無料講習会を17、18日に松山市で開催。参加を呼びかけている。（石見江莉加）

障害者フライングディスクは、直径23・5センチの樹脂製のディスクを投げ、5～7

メートル先の的を狙う「アキュラシー」と飛距離を競う「ディスタンス」の種目がある。性別や障害の程度にかかわらず、身体障害者と知的障害者が同じチームで参加できる。

県内の競技人口は約650人と多いが、審判の資格がある「公認指導者」は100人程度。5月に西条市ひうち陸上競技場で行われたえひめ大会のリハーサル大会では、人手不足で審判や運営スタッフらの休憩時間が取れないなどの問題が生じたという。

本大会では審判を中四国から集めるため、全く足りないわけではないが、余裕を持って運営するには審判や競技の知識がある運営スタッフがさらに必要として、協会はここ数年、講座を年2回開いて、人材確保を図ってきた。

松山市総合コミュニティセンターで開かれる講座では、競技ルールや障害者に関する知識などの解説のほか、フライングディスクの技術講習も行う。2日間受講し、レポートを提出すると、「日本障害者フライングディスク連盟公認指導者（二種）」の資格が取得できる。希望者は本大会の競技役員として運営に携わることができる。

競技委員長の栗林周次さん（58）は「選手も審判もスタッフも一緒になって楽しめる競技。一人でも多くの人に参加してほしい」と呼びかけている。

18歳以上であれば受講可。希望者は15日までに、県障害者フライングディスク協会（〒791・0054松山市空港通7の17の29の2）に郵送かファクス（089・908・6375）、メール(efda@hi.enjoy.ne.jp)で申し込む。問い合わせは同協会（089・908・6374）。

愛媛) パラ五輪へ夢支援 愛媛大クラウドファンディング 藤家秀一

朝日新聞 2017年6月10日

付型クラウドファンディング に関する記者説明会

パラリンピック出場を夢に陸上の練習に励んでいる武智湧史さん（左）と大塚才豪さん＝松山市道後樋又の愛媛大学本部



地元で陸上競技に取り組む知的障害者の人たちを支援しようと、愛媛大学が8日から、インターネットで出資を募るクラウドファンディング（CF）を始めた。7月末までに110万円を集めるのが目標。将来のパラリンピック出場を目指して、寄付金から遠征費などを賄う予定という。

CFは事業の趣旨をネットで公表し、賛同する人たちから小口の寄付金を集める仕組み。大学は今回、いずれも大学職員で教育学部附属特別支援学校時代から陸上競技に取り組む武智湧史（ゆうし）さん（19）、大塚才豪（としひで）さん（18）の2人と、彼らにあらがれて陸上を始めた附属特別支援学校の子どものために、CFを活用することにした。県外の陸上大会に出場するための遠征費や、靴・ユニホームなどの用具購入費に充てる。

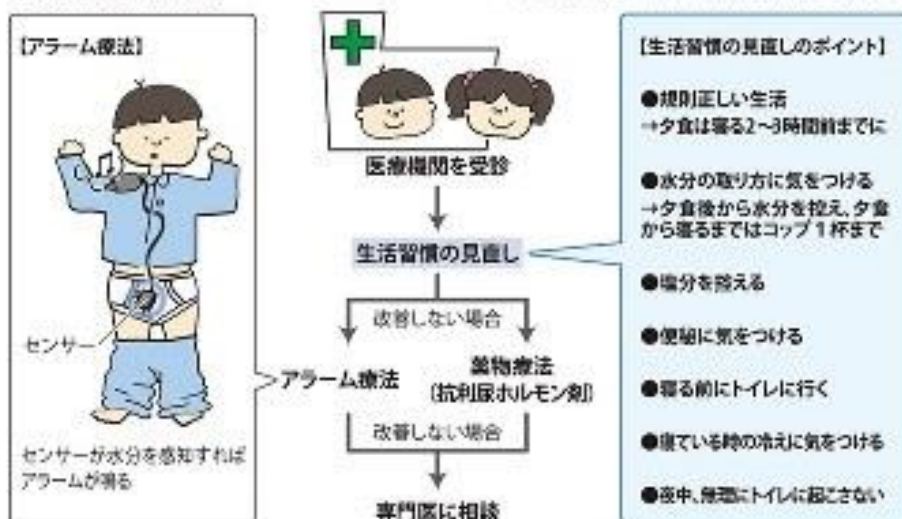
小学部、中学部、高等部で合わせて生徒が60人しかおらず、部活動もない同校で、武智さんと大塚さんが陸上競技を始めたのは3年前。陸上経験者の宮崎靖教諭（現・みなら特別支援学校）が、当時高等部2年だった武智さんの恵まれた体格をみて競技を勧め、中

学時代に陸上経験があった1学年下の大塚さんと一緒に練習し始めた。昨年4月には、2人が所属する県内初の障害者陸上競技クラブ「愛アスリートクラブ」も発足した。2人も毎日、大学での仕事が終わった後に練習に取り組んでいる。

おねしょ、続いたら受診を 親は「焦らず、怒らず、ほめる」の姿勢で

毎日新聞 2017年6月9日

夜尿症治療の流れ



朝、子どもの布団に大きな世界地図を見つけて思わず脱力。多くの親にこんな経験があるのでは。おねしょは親にとって悩みのタネだが、子どもは親が思う以上に悩んでいることがある。小学生以上になっても頻繁におねしょする場合は、夜尿

症という病気だ。昨夏、夜尿症の診療ガイドラインが12年ぶりに改定された。夜尿症の原因や治療法をまとめた。【反橋希美】

親子で「恥ずかしい」

<おねしょはありふれた子どもの症状です。性格や育て方は関係ありません>

夜尿症の正しい知識を伝えようと専門医らで2015年に結成した「おねしょ卒業！プロジェクト委員会」は、当事者向け冊子でこう呼びかける。

「いまだに夜尿症は『隠したい』『恥ずかしい』病気で、当事者の治療を遅らせてきました」とプロジェクトで委員長を務める兵庫医科大学の服部益治教授（小児科）は指摘する。服部教授によると、18歳までの夜尿症の患者は推定60万〜80万人。このうち病院を受診しているのは半数に満たないとみられる。

小児科で生活見直し

日本夜尿症学会の診療ガイドラインによると、夜尿症は、5歳以上の子どもが1カ月に1回以上の夜尿を3カ月以上続けた場合に診断される。原因はおもに（1）夜間に尿量を減らす「抗利尿ホルモン」がうまく分泌されず尿量が多くなる（2）尿をためるぼうこうの容量が小さい（3）ぼうこうが尿でいっぱいになっても目が覚めない覚醒障害——のいずれか、あるいは複数の要因が絡み合っている。遺伝の要素もあるほか、発達障害のある子は有病率が高いとされる。

受診の目安は「昼も漏らす場合は就学前の5〜6歳、夜だけの場合は小学校入学後」と服部さん。治療は、水分の取り方を変えるなど生活習慣の見直しから始まり、抗利尿ホルモン剤などの薬物治療、下着にセンサーを取り付け、尿が出た時にアラームで目覚めさせる「アラーム療法」などに移行。それでも改善しなければ専門医に相談するという流れをたどる＝図参照。

以前のガイドラインでは複数の治療法を同列に併記していたが、改定で国際的な臨床研究を基に診療の流れを示した。初診はかかりつけの小児科でよいが、プロジェクト委員会のウェブサイト（<http://onesho.com>）で紹介されている医療機関が参考になる。一方、半

年以上おねしょしていなかったのに再発した場合は、ストレスなど心因性の「2次性夜尿症」が疑われる。小児科のほか、心療内科などが受診先となる。

治療に半年～1年半

治療に向き合う親子の心構えは。夜尿症は「そのうち治る」と思われがちだが、月に延べ約30人の夜尿症の診療にあたっている「ゆたかこどもクリニック」(神戸市)の中村豊院長は「程度や年齢にもよるが、夜尿症は子どもの自己評価を下げるデータもあり、自然治癒にまかせるより治療した方がいい」と指摘する。夜尿症の有病率は小学校の新1年生で10%程度、5年生で5%程度と年齢が上がるにつれ減る傾向にはあるが、治療を受けた方が治癒率は2～3倍高くなるとされる。

加えて、中村院長が強調するのは「本人の治療へのモチベーション」の大切さだ。口には出さなくても、子どもは夜尿を恥ずかしがり、不安に思っている。「学校で言わないだけで、他にも夜尿症の子はいるんだよ。絶対に治るから大丈夫」。初診でこう語りかけると、多くはホッとした表情を見せる。治療は程度にもよるが、平均半年～1年半はかかる。見守る親は「焦らない、怒らない、ほめる」姿勢が肝心だ。

神戸市内の女性(34)は昨年春、当時小学3年だった息子(9)の治療をクリニックで相談した。きっかけは、息子が5年生で予定されている4泊5日の自然学校に「行きたくない」と言い出したこと。毎日夜尿があったが、発達障害があるため「泌尿器官の発達の遅れもあるのでは」と見守っていた。「人前でオムツをはくのを嫌がるようになって『恥ずかしい』という気持ちが芽生えてきた」のもあり決断した。

夕食の時間を規則正しくしたり、汁ものを控えたりするなどの生活改善と薬物療法を始めておよそ1年。ノートに毎日夕食と就寝時間、夜尿量を記録し、成功すれば「すごいね!」とほめ、漏れた日には「明日から頑張ろう」と励ました。夜尿は月に1回程度になり、女性は「子どもも気持ちが楽になったよう。目標の自然学校まで余裕を持って受診してよかった」と語る。

中村院長は「夜尿がまだ続いていても、薬を使ったり、学校の先生に夜起こしてもらったりすれば自然学校などの学校行事には参加できる。ぜひ医師や教師に相談して、自信を持って参加させてほしい」と話す。

おねしょ布団、清潔保つには? 水分飛ばす天日干しを

これから梅雨シーズン。おねしょした布団をどう清潔に保つか。ダスキン(大阪府吹田市)のクリーン・ケア営業本部でふとん丸洗いサービスを担当する三宅京子さんは「湿気がたまとダニが繁殖する。天日干しで水分を飛ばすことが第一」と強調する。雨の日や湿度が高い日は、布団乾燥機が役に立つ。敷布団の上に除湿シートを敷き、その上に厚手のタオルケットやベッドマットを重ねると、尿が敷布団まで染みこみにくい。化学繊維の洗える敷布団にして、コインランドリーで洗濯、乾燥するのも一案という。

神奈川) 児童虐待、最多3514件 県管轄の5児相把握 朝日新聞 2017年6月10日

県は2016年度に県管轄(横浜、川崎、相模原、横須賀市を除く県内市町村)の5児童相談所で受け付けた児童虐待の相談件数が3514件で、過去最多を更新したと発表した。15年度比で379件の増。県は、児童虐待についての報道などを踏まえた住民の関心の高まりを背景に、警察からの通報の増加と合わせて件数が増えているものとみている。

児童相談所別では、中央(藤沢市、茅ヶ崎市、大和市、寒川町)が1053件と最多で、以下厚木930件、平塚791件、小田原414件、鎌倉三浦地域326件だった。相談内容別では、子どもの前での夫婦げんかや兄弟の中での差別などの心理的虐待が1842件(52.4%)と半数を超え、過去5年間で一貫して最も多くなっている。

対象年齢別では、乳幼児が昨年度比90件増の計1538件と全体の43.8%を占めたほか、小学生も同147件増の1193件で全体の33.9%と高かった。(岩堀滋)

児童虐待認定 42件増の163件 鹿児島市

読売新聞 2017年06月10日

鹿児島市は9日、2016年度に市に寄せられた児童虐待の相談件数が201件だったことを明らかにした。前年度比3件増とほぼ横ばいだったが、このうち虐待と認定したのは163件で、前年度より42件増えた。

保育園や学校、虐待された児童の受け入れ施設などの各団体でつくる市要保護児童対策地域協議会代表者会議で示された。市によると、虐待と認定した163件のうち、ネグレクト（育児放棄）が98件で最多。このほか、身体的虐待37件、心理的虐待26件、性的虐待2件と続いた。

虐待を受けた子どもの年代は、小学生57件、3歳～就学前児43件、0～3歳未満36件の順。虐待者は8割が実母で137件、実父は18件だった。

会議では、こうした現状を踏まえて出席者が最近の状況を報告。「虐待が疑われる家を訪問しても玄関を開けてもらえないことがある」「長い期間をかけなければ、虐待があった親子の関係を修復するのは困難」といった意見が出された。

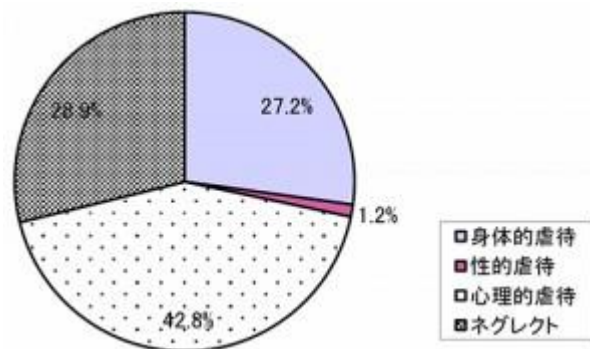
市は、個別のケースに対して関係機関による検討会議を随時行い、対応していくという。

児童虐待相談が増加 28年度心理的が4割

わかやま新法 2017年06月09日

虐待の種類別内訳

平成28年度に県内2カ所の児童相談所に寄せられた児童虐待相談は1123件（前年度比230件増）、市町村への相談は1162件（同279件増）で、いずれも前年度を大きく上回ったことが県子ども未来課のまとめで分かった。



県が受けた相談を虐待の種類別に見ると、言葉による脅しや子どもの面前での家族への暴力（面前DV）などの「心理的虐待」が最多の481件（42・8%、前年度比134件増）。次いで、食事を与えない、ひどく不潔にする、重い病気になっても病院に連れて行かないなどの「ネグレクト」が324件（28・9%、同64件増）、殴る蹴るなどの暴力を振るう「身体的虐待」が305件（27・2%、同36件増）、「性的虐待」が13件（1・2%、同4件減）だった。

心理的虐待が最も多いのは前年度と同じだが、面前DVとして通告されるケースが増えたことが、件数の大幅な増加につながったとみられている。ネグレクトと身体的虐待も共に増加したが、件数の順位は前年度と逆転した。

虐待者の内訳は、子どもと過ごす時間が長い実母が最も多い傾向が続いており、572件（50・9%）。次いで実父が379件（33・7%）、実父以外の父親が32件（2・8%）だった。

虐待を受けた子どもの年齢構成は、小学生が364件（32・4%）で最多。3歳～学齢前が273件（24・3%）、0～3歳未満が229件（20・4%）、中学生が159件（14・2%）、高校生・その他が98件（8・7%）だった。

大阪) 付属池田小事件16年 教員目指す学生に語り継ぐ 朝日新聞 2017年6月10日

児童8人の命が奪われた大阪教育大付属池田小学校（池田市）の殺傷事件から8日で16年。大教大は9日、柏原、天王寺両キャンパスの計91教室で、教員を目指す学生たちに事件を語り継ぐ授業をした。

大教大付属池田小事件の経過や学校安全の取り組みを学ぶ学生たち＝柏原市の大教大



報道陣に公開された柏原キャンパスの授業では、受講した1、2年生約90人が1分間の黙禱（もくとう）を捧げた。その後、事件の経過や事件後の学校安全の取り組みについて、大教大と池田小がまとめた冊子をもとに学んだ。佐久間敦史准教授（50）は「子どもたちは安心してできる居場所があってこそ力を発揮できる。体罰や虐待を含め、あらゆる暴力から子どもたちを守ってほしい」と語りかけた。



幼稚園の教員を目指す1年の北野優さん（18）は「日頃から訓練をして備えることが大事と感じた。子どもの安全を第一に守れる先生になりたいと思った」と話した。（沢木香織）

熊本地震対応で市職員168人にうつ危険性

読売新聞 2017年06月10日

熊本市の産業医を務める藤井可医師（37）は8日、熊本地震の対応にあたった市職員のうち、うつ状態や心的外傷後ストレス障害（PTSD）などに陥る危険性が高いと判断された職員が168人にのぼったことを明らかにした。

市は昨年5月、全職員に心身の状態を尋ねるアンケートを実施。回答者の約14%にあたる696人が、うつ状態やPTSDなどに陥る可能性があるとして判定された。さらに藤井医師らが面談したところ、うち168人は危険性が高く、経過観察が必要と判断したという。

この日、熊本大で行われた講演で、藤井医師は「罹災証明書の発行事務で、課員全員が食事できない」「夫婦ともに市職員で、子どもの世話を支障を来す」などの声を紹介。その上で、「家庭生活を安定させ、健康面の不安を解消することが重要」と指摘し、「健康不安などに配慮できていれば、人数は減っていたかも知れない」と述べた。

プレナス創業者、佐世保市に1億円寄付

産経新聞 2017年6月10日

持ち帰り弁当チェーン「ほっともっと」を展開するプレナス（福岡市）の社長を務め、昨年12月に85歳で亡くなった塩井末幸氏の妻が、長崎県佐世保市に1億円を寄付した。今月1日付で、市が9日明らかにした。市によると、塩井氏が生前、妻に「創業地である佐世保市の障害者のために寄付をしたい」と伝えていた。

発明王エジソンも実践？仕事術「アイデアマラソン」 樋口健夫さん提唱

1日1案で考えがまとまる 樋口
産経新聞 2017年6月9日

仕事や自由研究などで、魅力的なアイデアがどんどんわき出てきたらー。そんな夢想も、毎日最低1つのアイデアを考えて書きとめる「アイデアマラソン」を続けるとかなうかもしれない。提唱している樋口健夫さん（70）は「難しくないのとにかく始めてほしい」。

企業や大学でも採用され、広がりを見せている。(櫛田寿宏)



樋口さんが使用しているノート。文字だけでなく絵も多用している

「人は忘れるもの」

練り製品の製造販売大手、一正蒲鉾(新潟市東区)は今年3月から、樋口さんを講師に迎え、主に若手社員を対象にアイデアマラソンの研修を行っている。参加した経営企画部の宮ノ下道隆さん



(30)は「ノートに書いたものをしばらくたって見返したとき、人は忘れるものなんだなあと痛感しました。まだ短い期間ですが、アイデアが出るようになったと実感しています」と語る。

アイデアをまめにメモすることは、これまでも多くの人が行い、成功につなげている。ルネサンス期の芸術家、レオナルド・ダビンチや、物理学者のアインシュタインはたくさんメモを残している。また、発明王のエジソンはメモと一緒に構想のスケッチを描いたことで知られる。

商社マン時代に発案

樋口さんのアイデアマラソンは、思いついたアイデアのキーワードだけでなく、後で読み返して理解できるよう短文で書く。例えば、「電子辞書の外側に電卓をつける」などだ。人の悪口などネガティブなことは書かない。「アイデアのうち、実を結ぶのは300個のうち1個ほど。くだらないことでもいいから、どんどんアイデアを出すのがコツ」と説明。エジソンのようにスケッチを添えることも推奨している。

ずっと同じ規格のノートを使い続け、樋口さんのアイデアは44万2千を超えた。現在は毎日50個を目標にしている。

樋口さんがアイデアマラソンを考案したのは1984年、三井物産の商社マンとしてサウジアラビアの首都、リヤドに駐在していたとき。他社との競争に勝ち抜くため、受注のためのアイデアをノートに書いて作戦を立てるのが目的だった。「続けるうちに、アイデアは独創性を増すようになりました」と振り返る。

企業や大学で導入

平成16年に定年退職するとアイデアマラソン研究所を設立し、企業や大学などで研修会を開催している。これまでにキヤノンやジャパネットたかた、電気通信大などで実績を積み、アサヒビールでは商品開発を担当する社員が実践。岡山市の就実大経営学部はカリキュラムに取り入れている

神戸大大学院理学研究科の持田智行教授は18年から続けており、「ほとんど全ての研究テーマはアイデアマラソンで考えている」という。研究室の学生も取り組んでおり、「書いて、考えを整理するという良い習慣の効果を一緒に実感しています」と話している。

樋口さんは、2人乗りの自転車にソーラーパネルを取り付け、電動アシスト付きにするというアイデアを思いつき、和歌山大で試作した。「公共交通機関のない地方の高齢者の足として活用できそう」と話す。創造への意欲は衰え知らずだ。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行